

大阪くらしの今昔館所蔵品を巡る

大坂画壇の絵師たち

最終回 佐々木 蜻洲

大阪くらしの今昔館には近世の大坂画壇の絵師による作品が所蔵されています。
それらの中から注目すべき作品を紹介します。

大阪くらしの今昔館が所蔵する大阪画壇の絵を紹介してきたこの連載も今回が最終回です。今回とりあげる佐々木蜻洲（享和2年～安政3年、1802～1856）は、本姓は鷓鴣、名は禪、字は無外、号は蜻洲・天仙・龍馬などと称し、俗称は正作といました。紀伊に生まれ、大坂に移り住み、初め中井藍江（1766～1830）に、後に鎌田巖松（1798～1859）に画を学びました。天保15年（1844）に開かれた応挙南岳追福書画展に「一葉芋根」図を出品したという記録があります。家は上人町（現 中央区高麗橋4丁目）にありました。

漁樵図屏風 〈紙本墨画 6曲1双 各155.0×349.0cm〉

漁樵図は漁夫と樵夫を組み合わせて描いた伝統的な画題です。漁夫は網や竿をたずさえ、海や川で魚を捕ります。いっぽう樵夫は斧をにない、深山幽谷に分け入り日々薪を伐ります。自然を友として世俗の外に暮らす姿が隠者の暮らしに通ずると考えられ、多くの漢詩や漢画の題材となりました。中でも宋の邵雍（1011～1077）による『漁樵対問』は、漁樵の会話に託して処世や理想を説いたもので、後世に大きな影響を与えました。

本図の右隻には岸の柳の下に舟をつなぎ、酒盛りをする漁夫たちが描かれます。舟の舳先には高々と網が干され、一日の漁を終えたことを表しています。沖の小舟もやがて集まるのでしょう。いっぽう左隻には山小屋の前に柴を置き、体を休める樵夫たちが描かれます。寝そべる男や大きな口をあけて笑う男からは、いかにもこの暮らしを楽しんでいる様子がうかがえます。一般に柳や水景は夏、薪は冬の景物なので、右隻と左隻で夏と冬を対比させていることがわかります。

『浪華名流記』（安政3年版）は蜻洲について「為人豪邁、画亦筆力勁健」とし、性格や筆致が豪快であったと記します。本図は黒々とした墨色でくせのある樹形を描き、力強い画面を展開しています。師の中井藍江



漁樵図 右隻



漁樵図 左隻

や鎌田巖松は、円山・四条派の流れをくむ瀟洒な作風でしたが、本図はむしろ南画の味わいが強い作風となっています。ちなみに蜻洲の名にある蜻の訓読みは「とんぼ」（古名「あきつ」）、洲は「しま」ですから蜻洲は「あ

きつしま」すなわち日本の国を意味します。気宇壮大な名前にふさわしい、豪快な筆致で描かれた作品といえるでしょう。

（摂南大学 教授 岩間 香）